

„Germanistik Kyoto“ 執筆申し込み要領

1. „Germanistik Kyoto“ への論文執筆をご希望の会員の方は、下記の要領でお申し込み下さい。

(1) 氏名・住所・メールアドレス・題目を明記した論文要旨 (A4 版・横書きで 1,200 字以内、ドイツ語の場合は「執筆要領」1.2.の規定に従って 1 枚以内) を申し込み締切日までに電子ファイルで送付する。

(2) その後、「執筆要領」を遵守して作成した論文を、原稿の締切日までに送付する。

※ なお、論文は原則として未発表のものに限ります。ただし、口頭発表のみが先行している場合は可とします。(その場合には、申し込み時にその旨を明記して下さい。)

2. 審査について

(1) 申し込み締め切り後、送付された論文要旨をもとに、審査に付託するかどうかを決定します。(執筆申し込みが多数になった場合には、5 編程度の上限を設けることがあります。また、前年度寄稿者には、遠慮していただくことがあります。)

(2) 原稿送付の締め切り後、最終的に採否を編集委員会で決定します。採否の結果については、編集委員会からお知らせします。

3. 原稿について

(1) 日本語での執筆の場合、分量は 20,000 字までとし、別にドイツ語のレジюмеを添付するものとします。なお、詳細については「執筆要領」をご参照下さい。

(2) ドイツ語で執筆される場合は、「執筆要領」1.2.をご参照下さい。

(3) ドイツ語のレジюмеや、ドイツ語で執筆された論文は、あらかじめドイツ語母語話者に目を通しておいてもらって下さい。

4. 執筆申し込みおよび論文原稿は、電子ファイルの形で、日本独文学会京都支部宛て (メールアドレス kyoto@jgg.jp) に送付して下さい。

5. 締切日について

(第 21 号) 申し込み締切日 : 2019 年 12 月 15 日

原稿締切日 : 2020 年 2 月 29 日 (期日厳守)

„Germanistik Kyoto“ 執筆要領

1. 原稿について

- (1) 電子ファイルを、日本独文学会京都支部宛て（メールアドレス kyoto@jgg.jp）に送付して下さい。
- (2) 掲載論文の校正は、誤植の訂正以外は不可とします。

1.1. 日本語の場合

- (1) A4版の用紙に左右上下とも3cmの余白をとり、40字×30行（横書き）で書いて下さい（本文・註の合計で17枚以内）。
- (2) 段落の書き出しは1字下げして下さい。
- (3) 句読点には「、」と「。」を使用して下さい。なお、句読点も全角扱いとします。
- (4) 文中の欧文は原則として半角扱いとし、欧文を使用する箇所の前後は半角以上空けて下さい。
- (5) 作品名・雑誌名には原則として『 』、引用文には「 」を使用して下さい。ドイツ語の引用文には原則として „ “ を使用して下さい。
- (6) 用字用語は、原則として常用漢字・新仮名遣いを使用して下さい。また、一般に用いられていない表現・文字は使用しないで下さい。
- (7) 論文に添付するドイツ語のレジюмеについては、次項1.2の規定を適用します。なお、枚数は1枚以内とします。

1.2. ドイツ語の場合

- (1) A4版の用紙に左右上下とも3cmの余白をとり、約80ストローク×30行で書いて下さい（本文・註の合計で17枚以内）。
- (2) 段落の打ち始めは、3字下げして下さい。
- (3) イタリック体を使用する場合には、当該文字に赤で下線を引いて下さい。ボールド体を使用する場合には、当該文字に赤で波線を引いて下さい。
- (4) レジюмеは不要とします。

2. 註について

- (1) 註は後註とし、本文の末尾にまとめて記載して下さい。
- (2) 註には通し番号を付し、本文中の該当箇所の右肩にアラビア数字と半括弧で表記して下さい。また、註が文全体にかかわるときは、句点などの後ろにつけて下さい。

(例) ……」¹⁾ ……、²⁾

3. 文献の記載様式 (例)

(1) 独立の文献の場合

岩崎英二郎：ドイツ語不変化詞の用例 (大学書林) 1968.

Helbig, Gerhard: Geschichte der neueren Sprachwissenschaft. Leipzig (VEB Bibliographisches Institut) 1970.

(欧文文献では、括弧内の出版社名は省略可)

(2) 雑誌論文の場合

早川東三：「決定度」から見た後域における語順について (『ドイツ文学』 57号、1976)

Klein, Wolfgang: Textverständlichkeit — Textverstehen. In: Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik. Heft 55 (1984), S. 7-9.

4. 図版について

図版を使用する場合には、その分だけ枚数を減らし、本文・註・図版の合計で 17 枚以内として下さい。